



一橋大学
イノベーション研究センター

Hitotsubashi University
Institute of Innovation Research

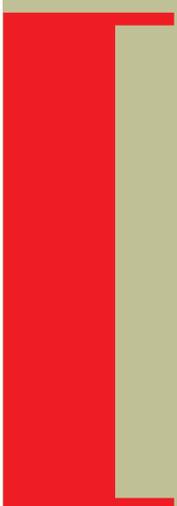
Hitotsubashi University
Institute of Innovation Research



ANNUAL REPORT 2017年度



Hitotsubashi University
Institute of Innovation Research



ANNUAL REPORT

2017年度

ANNUAL REPORT 2017年度

INDEX

目次

はじめに	
イノベーション研究センターについて	i

I. 研究活動	01
1) イノベーション研究フォーラム	02
2) 国際シンポジウム等	04

II. 研究員	05
1) 専任研究員	06
2) 兼任研究員	28
3) 外国人研究員（客員）	28

III. 教育活動	29
1) 講義	30
2) イノベーションマネジメント・政策プログラム	39

IV. 研究成果および刊行物	41
1) 一橋ビジネスレビュー	42
2) ワーキングペーパー	47
3) ケーススタディー	52

はじめに イノベーション研究センターについて

イノベーション研究センターは、以下3つのミッションを達成するために1997年4月に発足しました。

- － イノベーションの実証かつ理論的研究の実施
- － イノベーションに関する理論と実践の架け橋になること
- － 世界に開かれた研究拠点・知識融合の場となること

イノベーションに関する学術研究にとどまらず、広く実業界とも連携した世界的研究拠点を目指しています。

技術革新から組織革新に至るイノベーションが、社会発展に大きく貢献してきたことは歴史を垣間見れば容易に理解されます。日本のような天然資源に乏しく多くの人口を抱える国が発展を続けるためには、自ら「イノベーション」を生み出すことが必須です。特に欧米諸国にキャッチアップするかたちでの成長が望めなくなった1990年代以降、イノベーションの重要性は大きく高まりました。しかしながら、イノベーションの生成プロセスに関するわれわれの理解は不十分な状況にあり、技術開発の領域でイノベーションが扱われることはあっても、技術的発明が産業発展へと実を結ぶまでの長い社会的プロセスには、十分な注意が払われてこなかったといえます。

イノベーションはすぐれて社会的な営みです。それは経済、政治、組織、歴史、法制度などが相互に関連した複雑な社会現象であり、このプロセスを解明するには、社会科学の様々な専門領域が結集すると同時に、自然科学の知見も取り込みながら、学際的かつ体系的に研究を行う「場」が必要となります。イノベーション研究センターが、日本における産業経営研究の中核組織であった一橋大学商学部附属産業経営研究施設（＝産業経営研究所）を発展改組するかたちで設立された背景には、こうした時代の要請がありました。

主たる研究領域として、技術や組織、経営手法などのイノベーションを促進する要因を解明しようとする「技術革新研究」・「経営革新研究」、イノベーションの主体である革新者の個人的特徴を解明しようとする「革新者研究」、また、企業や大学、個人などの主体間のつながり方によってイノベーションが受ける影響を解明しようとする「ネットワーク研究」、こうした実証的研究を大きな視野で位置づけ、背後にある歴史的コンテクストを理解し、イノベーションの発展プロセスを経時的に追求する「経営史研究」・「技術史研究」、知的財産権などの法制度や会計制度などのイノベーションに与える影響を明らかにする「イノベーション制度研究」、そしてさらに、これらの実証研究を大きな理論的な視座から統一的に理解しようと試みる領域として「知識経営研究」、国際的な比較実証分析を行う領域として「国際比較研究」が設けられています。

イノベーション研究センターでの研究が、日本の企業組織や市場、さらに政治や経済の大きな枠組みを創造的に破壊して新しい発展段階へと導く上での重要な契機となるものとわたしたちは信じています。イノベーションの社会的プロセスの研究拠点になる日本社会が、そして国際社会がイノベーションを進める上で必要とされる能力の、その強化と向上に貢献することを社会的使命として、国の内外を問わず、大学、企業、官界から広く人々が集まって共同で研究することができるような拠点づくりを目指していきます。

沿革

1944年	11月	産業経営の理論的・実証的研究を行う学内の機関として発足した
1945年	5月	名称を東京商科大学産業能率研究所とした
1949年	5月	一橋大学産業経営研究所に改称した
1953年	6月	機関誌『ビジネス レビュー』発刊
1957年	4月	一橋大学商学部附属産業経営研究施設として官制化された
1997年	4月	一橋大学イノベーション研究センターとして学内共同教育研究施設に改組されて発足した
2000年	9月	機関誌『一橋ビジネスレビュー』新創刊
2012年	4月	商学研究科の附属研究施設となった

I. 研究活動

R

Hitotsubashi University
Institute of Innovation Research

I

1. イノベーション研究フォーラム——2017年度

イノベーション研究センターでは、イノベーション研究に関する研究会を、他大学の研究者、企業人、官界人らを交えて、月1回程度のペースで行っている。

<http://www.iir.hit-u.ac.jp/pages/forum/index>

国内の研究者にとどまらず、海外の研究者の研究発表を積極的に主催することにより、国際的な研究交流を活発に行い、研究水準のさらなる向上に努めている。

-
- 5月31日 Jean-Baptiste Marc Litrico
“Industry Ethos and Corporate Response to Institutional Pressures: Naturalizing Sustainability in Aviation”
(Associate Professor, Smith School of Business, Queen's University/
Visiting Associate Professor, IIR, Hitotsubashi University)
-
- 6月8日 余江
“China's Information Infrastructure and Innovation Efforts under the Globalization”
(中国科学院, 教授)
-
- 7月26日 加藤雅俊
“Family Employees and Innovation Behavior of Start-ups: A Family Embeddedness Perspective of Entrepreneurship (with Haibo Zhou)”
(関西学院大学経済学部, 准教授)
-
- 10月25日 Evan W. Lauteria
“The Cultural Foundations of Institutional Divergence: A Study of Nintendo and SEGA's ‘Console Wars’”
(PhD Student, University of California Davis)
-
- 12月6日 Ravi Madhavan
“The Evolution of Systems Integration Capability in China: Case Studies in Nuclear Power and Commercial Aircraft”
(Professor, The Joseph M. Katz Graduate School of Business, University of Pittsburgh)
-
- 12月27日 清水たくみ
“Coordinating Collective Framing Processes with Heterogeneous Actors in Technology Standard Development: A Topic Modeling Approach”
(Ph.D Candidate, Desautels Faculty of Management, McGill University)
-
- 1月24日 Cornelia Lawson
“Citizens of Somewhere: Examining the Geography of Foreign and Native-born Academics’ Engagement with External Actors”
(Prize Fellow, University of Bath)

1月31日 Lee, Sang-Gun
“A Comparative Study of Linkage of Effects of ICT Industries and Machinery and Equipment
Industries among the Korea, the United States, Germany and Japan”
(Professor, Sogang University Business School)

2月14日 Tuukka Toivonen
“From Creative 'Clashes' and 'Sparks' to Jolts: An Empirical Investigation of the Idea Journeys and
Feedback Interactions of Early-stage Digital Entrepreneurs in London”
(Senior Lecturer at the Institute for Global Prosperity (IGP), University College London)

2. 国際シンポジウム等

■ 「IIR Summer School 2017」

Venue: Sano-shoin Hall of Hitotsubashi University

Date: August 23, 2017

Organized by: IIR, Hitotsubashi University

Kick Off:

9:15- 9:25: Kentaro Nobeoka

Morning Session: (Chair: Kentaro Nakajima)

9:25-10:15: Mitsuru Igami

“Mergers, Innovation, and Entry-Exit Dynamics: Consolidation of the Hard Disk Drive Industry, 1996-2016” (with Kosuke Uetake)

10:30-11:10: Ayumi Higuchi

“Rethinking Functions of Organizational Hierarchies: From a Case Study of Flat Organization”

11:10-12:00: Maria Ivona Climaco

“Implications of Intellectual Capital for Innovation Success and Failure in the Biotechnology Industry”

Guest Speaker: (Chair: Yaichi Aoshima)

13:00-14:00: Guest Speaker, Ikujiro Nonaka “Cultivating Knowledge Maneuverability”

Afternoon Session 1: (Chair: Masaru Karube)

14:10-15:00: Ashish Bharadwaj

“Myths versus Reality of SEP Licensing: Perspectives from India”

15:00-15:50: Jesper Edman

“The Impact of a Foreign Identity on Host Country Product Market Entry”

Afternoon Session 2: (Chair: Joel Baker Malen)

16:15-17:05: Ilir Haxhi

“The Interplay of CPA, CSR & CG on CFP: A Configurational Approach”

17:05-17:55: Makoto Nirei

“Creative Destruction in Organizational Capital: The Case of Sharing Economy in Japan and U.S.”

(with Wendy Li and Kazufumi Yamana)

II. 研究員

RI

Hitotsubashi University
Institute of Innovation Research

1

1. 専任研究員——2017年度



青島 矢一

■ 履歴

- 1987年 一橋大学商学部卒業
- 1989年 一橋大学大学院商学研究科修士課程修了
- 1989年 一橋大学大学院商学研究科博士課程入学
- 1991年 マサチューセッツ工科大学スローン経営大学院博士課程入学
- 1996年 Ph.D. (経営学) マサチューセッツ工科大学スローン経営大学院
- 1996年 一橋大学産業経営研究所専任講師
- 1997年 一橋大学イノベーション研究センター専任講師
- 1999年 一橋大学イノベーション研究センター助教授
- 2007年 一橋大学イノベーション研究センター准教授
- 2012年～ 一橋大学イノベーション研究センター教授
- 2018年～ 一橋大学イノベーション研究センター長

■ 研究業績

1. 出版物

1.1. 論文, 本の1章

- 青島矢一・山崎邦利「ビジネスケース：土湯温泉 再生可能エネルギーを活用した地域復興」『一橋ビジネスレビュー』65巻1号, 2017年6月, 138-150頁
- 青島矢一「イノベーション・マネジメントとは」一橋大学イノベーション研究センター編『イノベーション・マネジメント入門 (第2版)』, 日本経済新聞社, 2017年10月, 第1章, 1-20頁
- 青島矢一・清水洋「イノベーションを実現する資源動員と知識創造」同書所収, 第7章, 165-184頁
- 青島矢一「新製品開発のマネジメント」同書所収, 第8章, 185-218頁
- 青島矢一・清水洋「イノベーションと企業間システム」同書所収, 第10章, 246-277頁

1.2. その他

(書評)

- 立本博文 (著)『プラットフォーム企業のグローバル戦略：オープン標準の戦略的活用とビジネス・エコシステム』/『書齋の窓』有斐閣, 2018.05月号 (No. 657),
http://www.yuhikaku.co.jp/static/shosai_mado/html/1805/06.html

2. コンファレンス、学会発表

青島矢一「モジュラー化がもたらす競争力と産業構造への影響」日本MOT学会「モジュール化」対「すり合わせ」研究会, 2017年5月19日, 立命館東京キャンパス, 招待

青島矢一「企業によるイノベーションの促進」第31回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会, 公共圏における科学技術・教育研究拠点 (STiPS) 主催, 2017年8月10日, 大阪大学豊中キャンパス, 招待

Asano, Kenji and Yaichi Aoshima, "Effects of Local Government Subsidy on Rooftop Solar PV in Japan," ICRERA 2017, 6th International Conference on Renewable Energy Research and Application, October 6, 2017, California, USA, refereed



和泉 章

■ 履歴

- 1987年 東京工業大学工学部電子物理工学科卒業
- 1989年 東京工業大学大学院理工学研究科電子物理工学専攻修士課程修了
- 1989年 通商産業省入省
- 1999年 米国タフツ大学フレッチャースクール法律外交修士課程修了
- 2003年 ドイツ証券会社東京支店株式調査部（～2005年）
- 2004年 東北大学大学院工学研究科技術社会システム専攻博士課程修了
（博士号（工学）取得）
- 2010年 （独）新エネルギー・産業技術総合開発機構（NEDO）
新エネルギー部長（～2012年）
電子・材料・ナノテクノロジー部長（～2013年）
- 2013年 経済産業省産業技術環境局認証課長 兼 管理システム標準化推進室長
- 2014年 経済産業省産業技術環境局国際電気標準課長
- 2015年 （独）製品評価技術基盤機構（NITE）企画管理部長
- 2017年～ 一橋大学イノベーション研究センター教授

■ 研究業績

1. コンファレンス、学会発表

- 和泉章「家庭用製品の安全技術の社会実装に関する事例研究—ガスこんろの過熱防止装置」
研究・イノベーション学会 第32回年次学術大会，2017年10月29日，京都大学吉田キャンパス
- 和泉章，パネル討論（コーディネーター），画像電子学会 第21回国際標準化教育研究会
「視覚・聴覚支援システムと標準化教育」2018年1月19日，金沢工業大学虎ノ門キャンパス
- 和泉章「再生可能エネルギー技術の現状と今後の動向」（一財）エンジニアリング協会
220回ビジネス講演会，2018年4月12日，東京



江藤 学

■ 履歴

- 1983年 大阪大学基礎工学部卒業
- 1985年 大阪大学大学院基礎工学研究科博士前期課程修了
- 1985年 通商産業省入省
- 1989年 科学技術庁科学技術政策局（～1990年）
- 1994年 米国ニューメキシコ大学客員研究員
- 1995年 筑波大学社会科学系講師（～1997年）
- 2000年 外務省経済協力開発機構日本政府代表部（在パリ）
- 2004年 （独）産業技術総合研究所
- 2006年 経済産業省産業技術環境局 認証課長
- 2006年～ 経済産業研究所 コンサルティングフェロー
- 2008年 博士号（工学） 東北大学
- 2008年 一橋大学イノベーション研究センター教授（～2011年3月）
- 2011年 日本貿易振興機構ジュネーブ事務所長（～2013年7月）
- 2013年 一橋大学イノベーション研究センター特任教授
- 2016年～ 一橋大学イノベーション研究センター教授

■ 研究業績

1. 出版物

1.1. 論文, 本の1章

江藤学「イノベーションと政策・制度」一橋大学イノベーション研究センター編『イノベーション・マネジメント入門（第2版）』, 日本経済新聞社, 2017年10月, 第11章, 280-303頁

赤池伸一・江藤学「科学技術イノベーション政策」同書所収, 第12章, 304-332頁

江藤学「イノベーションと規制・制度」同書所収, 第15章, 393-417頁

江藤学「標準化によるアウトバウンド型オープンイノベーション」『日本知財学会誌』 Vol. 14, No. 1, 2017年10月, 43-55頁

江藤学・鷲田祐一「連載 日本発の国際標準化 戦いの現場から（1）-（4）」『一橋ビジネスレビュー』 65巻3号～66巻1号, 2017年12月～2018年6月

江藤学「標準化人材育成の必要性」『標準化と品質管理』（一財）日本規格協会, Vol. 71, No. 4, 2018年4月, 4-9頁

2. 未出版物

2.1. ワーキングペーパー

吉岡（小林）徹・木村めぐみ・江藤学「地域イノベーションの事例研究：高知におけるファインバブルの農業・水産業への応用」IIR ケーススタディ CASE#17-03, 2017年5月

江藤学・生稲史彦・金東勲・木村めぐみ・中村彰憲・嶋原盛之・清水洋・山口翔太郎「西角友宏第1回インタビュー前半：中学時代までの生き立ち」IIR ワーキングペーパー WP#18-22, 2018年3月

江藤学・生稲史彦・金東勲・木村めぐみ・中村彰憲・嶋原盛之・清水洋・山口翔太郎「西角友宏第1回インタビュー後半：高校時代からパシフィック工業への入社まで」IIR ワーキングペーパー WP#18-23, 2018年3月

江藤学・生稲史彦・金東勲・木村めぐみ・嶋原盛之・清水洋・山口翔太郎「西角友宏第2回インタビュー前半：『スカイファイター』の開発」IIR ワーキングペーパー WP#18-24, 2018年3月

江藤学・生稲史彦・金東勲・木村めぐみ・嶋原盛之・清水洋・山口翔太郎「西角友宏第2回インタビュー後半：メカゲームからビデオゲームへ」IIR ワーキングペーパー WP#18-25, 2018年3月

2.2. ケーススタディ

尾田基・江藤学「地域イノベーションの事例研究：有限会社ヤマコ武田商店」IIR ケーススタディ CASE#18-01, 2018年5月

2.3. 教材

江藤学・辻田美紗・佐々木通孝（著）『教則 標準化とビジネス』国立大学法人山口大学（監修），2018年8月，355頁

3. コンファレンス、学会発表

Eto, Manabu, “Education of Standardization in Japan,” ICES (International Cooperation for Education about Standardization) 2017, August 10, 2017, Northwestern University Pritzker School of Law, Illinois, USA

江藤学「標準を利用したアウトバウンド型オープンイノベーションの効用分類」研究・イノベーション学会 第32回年次学術大会，2017年10月29日，京都大学吉田キャンパス

江藤学「中小企業のビジネスに対する標準化の影響」日本知財学会 第15回年次学術研究発表会，2017年12月3日，国士舘大学

Eto, Manabu, “Human Resources of Standardization in Japan,” APEC-IEC-ISO Workshop “Developing Competence Requirements and Career Path for Standards Professionals,” 23-24 January, 2018, Singapore



大山 睦

■ 履歴

- 1997年 横浜市立大学商学部卒業
- 1999年 慶應義塾大学 修士（経済学）
- 2002年 シカゴ大学 修士（経済学）
- 2008年 ニューヨーク州立大学バッファロー校 Ph.D.（経済学）
- 2008年 イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校 IGB ポスドク研究員
- 2009年 イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校マネジメント学部講師
- 2010年 北海道大学経済学研究科准教授
- 2015年～ 一橋大学イノベーション研究センター准教授
- 2017年4月 メリーランド大学ロバート・スミス・ビジネススクール 客員研究員
(～2018年3月)

■ 研究業績

1. 未出版物

1.1. ワーキングペーパー

Agarwal, Rajshree, Serguey Braguinsky and Atsushi Ohyama, “Centers of Gravity: The Effect of Shared Leadership and Stability in Top Management Teams on Firm Growth and Industry Evolution,” SSRN Working Paper, October 16, 2017

https://papers.ssrn.com/sol3/papers.cfm?abstract_id=3053883

Ohyama, Atsushi, Ryo Kambayashi, Taisuke Kameda, Takuma Kawamoto and Shigeru Sugihara, “Management in Japan: A First Look at Japan MOPS Data,” Mimeo, 2017

2. コンファレンス、学会発表

Ohyama, Atsushi, “Overview of JP MOPS,” International Management Surveys Conference, December 6, 2017, アメリカセンサス局, Suitland, Maryland, USA



軽部 大

■ 履歴

- 1993年 一橋大学商学部卒業
- 1995年 一橋大学大学院商学研究科修士課程修了 修士（商学）
- 1998年 一橋大学大学院商学研究科博士課程修了 博士（商学）
- 1998年 東京経済大学経営学部専任講師
- 2002年 一橋大学イノベーション研究センター助教授
- 2006年 フルブライト客員研究員（プリンマーカレッジ，ペンシルベニア大学ウォートンスクール，2007年12月まで）
- 2007年 一橋大学イノベーション研究センター准教授
- 2017年～ 一橋大学イノベーション研究センター教授

■ 研究業績

1. 出版物

1.1. 著書

『関与と越境：日本企業再生の論理』有斐閣，2017年4月，320頁

1.2. 論文，本の1章

軽部大「イノベーションと企業の栄枯盛衰」一橋大学イノベーション研究センター編『イノベーション・マネジメント入門（第2版）』，日本経済新聞社，2017年10月，第3章，50-79頁

軽部大「イノベーションと企業戦略」同書所収，第9章，219-245頁

軽部大・内田大輔「ビジネスケース：富士メガネ ビジョンが未来を切り拓く」『一橋ビジネスレビュー』65巻4号，2018年3月，142-157頁

2. コンファレンス、学会発表

Karube, Masaru, “When and How Do Audit Firms Trigger Status Downgrades of Post-IPO Firms?,” Refereed academic presentation for the 29th SASE (Society for the Advancement of Socio-Economics) annual conference, June 30, 2017, Université Claude Bernard Lyon 1, Lyon, France

Karube, Masaru, “The Japanese System in Evolution: Industries in Transition and Emerging Creative Industries: Lessons from Japanese Styles,” Academic presentation for the Refereed Presenter Symposium of the 2017 Annual Meeting of Academy of Management, August 5, 2017, Atlanta, Georgia, USA

軽部大「公認会計士の過誤とその処遇：資本主義の『品質』はいかに担保されるか」組織学会九州支部例会，2017年10月14日，西南学院大学西新キャンパス，福岡

軽部大『『関与と越境』から見る日本企業の課題』組織学会関西支部例会， 2018年2月13日， 大阪市立大学梅田キャンパス

Karube, Masaru, “Unequal Punishment for Professionals: How Audit Firms Respond to their Accountants’ Misconduct in Financial Statements,” Invited academic presentation for International Strategy & Marketing Seminar at Amsterdam Business School, March 6, 2018, Amsterdam, Netherlands



カン ビョンウ

■ 履歴

- 2006年 東北大学工学部卒業
- 2008年 東北大学大学院工学研究科博士前期課程修了
- 2008年 LG Electronics 研究員（～2011年）
- 2014年 東京大学大学院 Ph.D.（技術経営戦略学）
- 2014年 アジア経済研究所研究員（～2016年）
- 2016年～一橋大学イノベーション研究センター専任講師

■ 研究業績

1. 出版物

1.1. 論文, 本の1章

Nabeshima, Kaoru, Mila Kashcheeva and Byeongwoo Kang, “The Impacts of Export Competition on International Technology Flows,” *Applied Economics Letters*, Vol. 25, No. 15, October 25, 2017, pp. 1058–1061, refereed
<http://www.tandfonline.com/doi/full/10.1080/13504851.2017.1394969>

Kang, Byeongwoo, Yukihiro Sato and Yasushi Ueki, “Mobility of Highly Skilled Retirees from Japan to Korea and Taiwan,” *Pacific Focus*, Vol. 33, No. 1, April 2018, pp. 58-82, refereed

1.2. その他

カン・ビョンウ「ノキア衰退前後のスタートアップ支援プログラムの比較（原文（韓国語）:노키아 쇠퇴 전후의 창업 지원 프로그램의 비교）」『技術と経営』（原文（韓国語）『기술과 경영』2017年10月，53-55頁

2. 未出版物

2.1. ワーキングペーパー

Nabeshima, Kaoru, Mila Kashcheeva and Byeongwoo Kang, “The Impact of Import vs. Export Competition in Technology Flows between Countries,” IDE Discussion Papers No. 654, April 2017

Kang, Byeongwoo, Heikki Rannikko and Erno T. Tornikoski, “How a Laid-off Employee Becomes an Entrepreneur: The Case of Nokia’s Bridge Program,” IIR Working Paper WP#17-15, December 2017

Bharadwaj, Ashish and Byeongwoo Kang, “How Does Innovation Occur in India? Evidence from the JIRICO Survey,” IIR Working Paper WP#18-05, January 2018

3. コンファレンス、学会発表

Kang, Byeongwoo, Yukihiro Sato and Yasushi Ueki, “Mobility of Highly Skilled Retirees from Japan to Korea and Taiwan,” Second Annual Conference of the UCL Center for Comparative Studies of the Emerging Economies, June 26, 2017, UCL, London, UK

Kang, Byeongwoo, Panel Discussion on “Network Analysis of Engineers: Use of IETF Email Data,” Conference on China’s Innovation System: Understanding Complex System by New Data, October 22, 2017, Donghua University, Shanghai, China, invited

Kang, Byeongwoo, Heikki Rannikko and Erno T. Tornikoski, “How a Laid-off Employee Becomes an Entrepreneur: The Case of Nokia’s Bridge Program,” RENT XXXI Conference, November 17, 2017, Lund University, Lund, Sweden, refereed

Kang, Byeongwoo and Rudi Bekkers, “Just-in-time Patents and the Development of Standards,” Law and Economics Workshop on IPRs for Standard-based Innovations, 2017年12月9日, 早稲田大学, 招待

Kang, Byeongwoo, “Innovation Processes in Public Research Institutes,” Workshop on Industrial Competitiveness in East Asia, March 20, 2018, ERIA, Jakarta, Indonesia, invited



清水 洋

■ 履歴

- 1997年 中央大学商学部卒業
- 1999年 一橋大学大学院商学研究科修士課程修了
- 2002年 ノースウェスタン大学大学院歴史学研究科修士課程修了
- 2007年 Ph.D. (経済史) ロンドン大学ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス
- 2007年 アイントホーヘン工科大学 (オランダ) ポストドクトラルフェロー
- 2008年 一橋大学イノベーション研究センター専任講師
- 2011年 一橋大学イノベーション研究センター准教授
- 2017年～ 一橋大学イノベーション研究センター教授

■ 研究業績

1. 出版物

1.1. 論文, 本の1章

Hori, Keisuke, Yusuke Hoshino and Shimizu Hiroshi, “Which Do You Prefer, Artisanal or Laboratory Made?: Quantification in Traditional Japanese Sake Brewing,” *Hitotsubashi Journal of Commerce and Management*, Vol. 51, No. 1, October 2017, pp. 1-16

清水洋・米倉誠一郎「イノベーションの歴史」一橋大学イノベーション研究センター編『イノベーション・マネジメント入門 (第2版)』, 日本経済新聞社, 2017年10月, 第2章, 22-49頁

清水洋・野間幹晴「イノベーションとアントレプレナーシップ」, 同書所収, 第6章, 144-164頁

青島矢一・清水洋「イノベーションを実現する資源動員と知識創造」, 同書所収, 第7章 165-184頁

青島矢一・清水洋「イノベーションと企業間システム」, 同書所収, 第10章, 246-277頁

清水洋・山口翔太郎・金東勲「イノベーションと流動性: 企業の成長と脱成熟のジレンマ」『証券アナリストジャーナル』, (公社)日本証券アナリスト協会, Vol. 56, No. 6, 2018年6月, 6-15頁

1.2. その他

清水洋「時間を長くとりませんか」『組織科学』第50巻4号, 2017年6月20日, 85頁

2. 未出版物

2.1. ワーキングペーパー

Shimizu, Hiroshi and Naohiko Wakutsu, “Spin-Outs and Patterns of Subsequent Innovation: Technological Development of Laser Diodes in the US and Japan,” IIR Working Paper WP#17-14, August 2017

福田一史・井上明人・嶋原盛之・清水洋・山口翔太郎・黄巍「川口洋司第1回インタビュー前半：ゲーム雑誌の出版に携わるまで」IIR ワーキングペーパー WP#18-01, 2018年1月

福田一史・井上明人・嶋原盛之・清水洋・山口翔太郎・黄巍「川口洋司第1回インタビュー後半：家庭用ゲーム雑誌の先駆け」IIR ワーキングペーパー WP#18-02, 2018年1月

清水洋・金東勲・嶋原盛之・山口翔太郎「佐藤秀樹第1回インタビュー前半：幼少期の暮らし」IIR ワーキングペーパー WP#18-16, 2018年2月

清水洋・金東勲・嶋原盛之・山口翔太郎「佐藤秀樹第1回インタビュー後半：中学時代からセガ入社まで」IIR ワーキングペーパー WP#18-17, 2018年2月

清水洋・嶋原盛之・山口翔太郎「佐藤秀樹第2回インタビュー前半：テレビゲームの開発に着手」IIR ワーキングペーパー WP#18-18, 2018年2月

清水洋・嶋原盛之・山口翔太郎「佐藤秀樹第2回インタビュー後半：家庭用ゲーム機における任天堂との競争」IIR ワーキングペーパー WP#18-19, 2018年2月

清水洋・嶋原盛之・山口翔太郎「佐藤秀樹第3回インタビュー前半：ゲームにおけるハードとソフト」IIR ワーキングペーパー WP#18-20, 2018年2月

清水洋・嶋原盛之・山口翔太郎「佐藤秀樹第3回インタビュー後半：セガサターン、ドリームキャスト、ソフトウェアメーカーへの転身」IIR ワーキングペーパー WP#18-21, 2018年2月

江藤学・生稲史彦・金東勲・木村めぐみ・中村彰憲・嶋原盛之・清水洋・山口翔太郎「西角友宏第1回インタビュー前半：中学時代までの生き立ち」IIR ワーキングペーパー WP#18-22, 2018年2月

江藤学・生稲史彦・金東勲・木村めぐみ・中村彰憲・嶋原盛之・清水洋・山口翔太郎「西角友宏第1回インタビュー後半：高校時代からパシフィック工業への入社まで」IIR ワーキングペーパー WP#18-23, 2018年2月

江藤学・生稲史彦・金東勲・木村めぐみ・嶋原盛之・清水洋・山口翔太郎「西角友宏第2回インタビュー前半：「スカイファイター」の開発」IIR ワーキングペーパー WP#18-24, 2018年2月

江藤学・生稲史彦・金東勲・木村めぐみ・嶋原盛之・清水洋・山口翔太郎「西角友宏第2回インタビュー後半：メカゲームからビデオゲームへ」IIR ワーキングペーパー WP#18-25, 2018年2月

福田一史・生稲史彦・井上明人・金東勲・木村めぐみ・中村彰憲・嶋原盛之・清水洋・山口翔太郎「西角友宏第3回インタビュー前半：「スペースインベーダー」開発の経緯」IIR ワーキングペーパー WP#18-26, 2018年2月

福田一史・生稲史彦・井上明人・金東勲・木村めぐみ・中村彰憲・嶋原盛之・清水洋・山口翔太郎「西角友宏第3回インタビュー後半：『スペースインベーダー』のゲームデザインとマーケティング」IIR ワーキングペーパー WP#18-27, 2018年2月

Yamaguchi, Shotaro, Ryuji Nitta, Yasushi Hara and Hiroshi Shimizu, “Staying Young at Heart or Wisdom of Age: Longitudinal Analysis of Age and Performance in US and Japanese Firms,” IIR Working Paper WP#18-41, June 2018

3. 受賞

清水洋（著）『ジェネラル・パーパス・テクノロジーのイノベーション』（有斐閣／2016年3月刊行）が第33回組織学会高宮賞（著書部門）を受賞，2017年6月



中島 賢太郎

■ 履歴

- 2003年 東京大学経済学部卒業
- 2008年 東京大学大学院経済学研究科博士課程修了 博士（経済学）
- 2008年 東北大学大学院経済学研究科
地域経済金融論寄附講座（七十七）准教授
- 2010年 一橋大学経済研究所経済制度研究センター准教授
- 2011年 東北大学大学院経済学研究科准教授
- 2017年～ 一橋大学イノベーション研究センター准教授

■ 研究業績

1. 出版物

1.1. 論文, 本の1章

Xu, Hangtian and Kentaro Nakajima, “Highways and Industrial Development in the Peripheral Regions of China,” *Papers in Regional Science*, Vol. 96, No. 2, June 2017, pp. 325-356, refereed

Inoue, Hiroyasu, Kentaro Nakajima and Yukiko Saito, “Localization of Knowledge-creating Establishments,” *Japan and the World Economy*, Vol. 43, September 2017, pp. 23-29, refereed

Nakajima, Kentaro and Tetsuji Okazaki, “The Expanding Empire and Spatial Distribution of Economic Activities: The Case of Japan’s Colonization of Korea during the Pre-war Period,” *Economic History Review*, Vol. 71, Issue 2, May 2018, pp. 593-616, refereed

中島賢太郎・上原克仁・都留康「企業内コミュニケーション・ネットワークが生産性に及ぼす影響：ウェアラブルセンサを用いた定量的評価」『経済研究』69巻1号, 2018年1月, 18-34頁, 査読有

都留康・徳丸宜徳・福澤光啓・中島賢太郎「製品開発における上流工程管理と人材マネジメント：開発成果に対する効果の検証」『経済研究』69巻1号, 2018年1月, 35-54頁 査読有

中島賢太郎「第3章 第2節 工業用地と工業集積」深尾京司・中村尚史・中林真幸（編）『岩波講座 日本経済の歴史 5 現代 1』岩波書店, 2018年1月, 所収, 191-200頁

中島賢太郎「第5章 第3節 運輸と地域経済——鉄道を中心に」同書所収, 267-280頁

1.2. その他

(書評)

Jinzai no kokusai ido to inobeshon (International Migration of Highly Skilled Workers and Innovation, by Yukiko Murakami, Tokyo: NTT Publishing, 2015) / *Social Science Japan Journal*, Vol. 20, Issue 2, August 1, 2017, pp. 323-325

2. 未出版物

2.1. ワーキングペーパー

植杉威一郎・中島賢太郎・細野薫「減損会計は企業投資行動に影響を及ぼすか」RIETI Discussion Paper Series 17-J-033, 2017年4月

3. コンファレンス、学会発表

Nakajima, Kentaro, “Identifying Neighborhood Effects among Firms: Evidence from the Location Lotteries of the Tokyo Tsukiji Fish Market,” 大阪大学待兼山セミナー, 2017年4月6日, 大阪大学, 招待

Nakajima, Kentaro and Kensuke Teshima, “Identifying Neighborhood Effects among Firms: Evidence from the Location Lotteries of the Tokyo Tsukiji Fish Market,” 7th European Meeting of the Urban Economics Association, Copenhagen, Denmark, May 26, 2017, refereed

中島賢太郎「ミクロ立地データを用いた集積検出とその応用について」日本経済学会2017年度春季大会, 立命館大学びわこ・草津キャンパス, 2017年6月24日, 招待

Nakajima, Kentaro, “Identifying Neighborhood Effects among Firms: Evidence from the Location Lotteries of the Tokyo Tsukiji Fish Market,” 近畿大学経済学ワークショップ, 2017年7月20日 近畿大学, 招待

Nakajima, Kentaro, “Workers’ Communication Network and Their Working Performance,” Kyoto Summer Workshop on Applied Economics, 2017年8月2日, 京都大学, 招待

Nakajima, Kentaro, “Identifying Neighborhood Effects among Firms: Evidence from the Location Lotteries of the Tokyo Tsukiji Fish Market,” 東京大学都市経済ワークショップ, 2017年9月22日, 東京大学, 招待

Nakajima, Kentaro, “Identifying Neighborhood Effects among Firms: Evidence from the Location Lotteries of the Tokyo Tsukiji Fish Market,” 東北大学現代経済学研究会, 2017年10月5日, 東北大学, 招待

Nakajima, Kentaro, “Identifying Neighborhood Effects among Firms: Evidence from the Location Lotteries of the Tokyo Tsukiji Fish Market,” 統計研究会, 2017年10月20日, 日本政策投資銀行設備投資研究所, 招待

Nakajima, Kentaro, “Identifying Neighborhood Effects among Firms: Evidence from the Location Lotteries of the Tokyo Tsukiji Fish Market,” 経済学セミナー, 2017年11月1日, 青山学院大学, 招待

Nakajima, Kentaro, “Impact of Workplace Communication Networks on Productivity: A New Approach Using Wearable Sensors,” GRIPS/U. Tokyo International Workshop, 2017年11月6日, 東京大学, 査読有り

Nakajima, Kentaro, “Identifying Neighborhood Effects among Firms: Evidence from the Location Lotteries of the Tokyo Tsukiji Fish Market,” 12th Meeting of the Urban Economics Association, November 10, 2017, Vancouver, Canada, refereed

- Nakajima, Kentaro, “The Expanding Empire and Spatial Distribution of Economic Activities: The Case of Japan’s Colonization of Korea during the Pre-war Period,” 住宅土地経済研究会, 2018年2月1日, 日本住宅総合センター, 招待
- Nakajima, Kentaro, “Identifying Neighborhood Effects among Firms: Evidence from the Location Lotteries of the Tokyo Tsukiji Fish Market,” EHESS-Keio University Workshop, February 20, 2018, EHESS, Paris, France
- Nakajima, Kentaro, “Impact of Workplace Communication Networks on Productivity: A New Approach Using Wearable Sensors,” 関西学院大学産業組織ワークショップ, 2018年3月9日 関西学院大学, 招待
- Nakajima, Kentaro, “Measuring the Supply Elasticity of Housing: The Case of Japan,” Hitotsubashi International Workshop on Real Estate and the Macro Economy, 2018年3月27日, 一橋講堂
- Nakajima, Kentaro, “Impact of Workplace Communication Networks on Productivity: A New Approach Using Wearable Sensors,” Society of Labor Economists Annual Meeting, May 5, 2018, Toronto, Canada, refereed
- Nakajima, Kentaro, “The Impact of High-Speed Rail on Innovation,” 日本経済学会 2018年度春季大会, 2018年6月9日, 兵庫県立大学, 査読有り
- Nakajima, Kentaro, “Identifying Neighborhood Effects among Firms: Evidence from the Location Lotteries of the Tokyo Tsukiji Fish Market,” Society of Economic Dynamics Annual Meeting, June 29, 2018, Mexico City, Mexico, refereed
- Nakajima, Kentaro, “Impact of Workplace Communication Networks on Productivity: A New Approach Using Wearable Sensors,” 東京労働経済学研究会, 2018年7月6日, 東京大学, 招待
- Nakajima, Kentaro, “Identifying Neighborhood Effects among Firms: Evidence from the Location Lotteries of the Tokyo Tsukiji Fish Market,” ポリシーモデリングワークショップ, 2018年7月14日, 政策研究大学院大学, 招待
- Nakajima, Kentaro, “Estimating the Impact of Building Height Restrictions on Land Price,” Kyoto Summer Workshop on Applied Economics, 2018年8月4日, 京都大学, 招待
- 中島賢太郎「都市とイノベーション（特別報告）」日本経済学会 2018年度秋期大会, 2018年9月8日, 学習院大学, 招待
- Nakajima, Kentaro, “Impact of Workplace Communication Networks on Productivity: A New Approach Using Wearable Sensors,” 関西労働経済学研究会, 2018年11月16日, 大阪大学, 招待



西口 敏宏

■ 履歴

- 1977年 早稲田大学政治経済学部卒業
- 1981年 M.Sc. (産業社会学) ロンドン大学インペリアル・カレッジ
- 1986年 MIT 国際自動車プログラム常勤研究員
- 1990年 D.Phil. (社会学) オックスフォード大学
- 1990年 インシアド, 常勤ポストドクトラルフェロー
- 1991年 インシアド, ユーロ・アジアセンター, リサーチフェロー
- 1991年 ペンシルベニア大学ウォートン・スクール経営学部助教授
- 1994年 一橋大学産業経営研究所助教授
- 1997年 一橋大学イノベーション研究センター教授 (~2016年3月)
- 2001年夏 ケンブリッジ大学ジャッジ経営大学院客員研究員
- 2002年夏 メリーランド大学公共政策大学院客員上級研究員
- 2003年夏 同 上
- 2004年秋 マサチューセッツ工科大学国際研究センター客員研究員
- 2005年夏 同 上
- 2007年 財団法人防衛調達基盤整備協会 非常勤理事 (~2012年)
- 2008年~ 財務省財務総合政策研究所 特別研究官
- 2012年 マサチューセッツ工科大学スローン経営大学院 フルブライト客員研究員
(~2013年8月)
- 2016年4月~ 一橋大学名誉教授
- 2016年4月 一橋大学イノベーション研究センター特任教授 (~2018年3月)
- 2018年4月~ 武蔵大学客員教授

■ 研究業績

1. 出版物

1.1. 著書

西口敏宏・辻田素子『コミュニティー・キャピタル論』光文社新書, 2017年12月, 334頁

1.2. 論文, 本の1章

Nishiguchi, Toshihiro and Alexandre Beaudet, “The Toyota Group and the Aisin Seiki Fire,” in Fujimoto, Takahiro and Daniel Arturo Heller, eds., *Industries and Disasters: Building Robust and Competitive Supply*, New York, NY: Nova Science Pub Inc., October 2017, Chap. 5, pp. 117-146

西口敏宏「コミュニティー・キャピタルで捉え直す」金光淳(編著)『ソーシャル・キャピタルと経営(仮)』ミネルヴァ書房, 近刊, 所収, 第5章

2. 未出版物

2.1. ワーキングペーパー

西口敏宏・辻田素子「東日本大震災後のルネサス支援——同一尺度の信頼が生まれた」
IIR ワーキングペーパー WP#17-06, 2017年5月

Nishiguchi, Toshihiro, “Crisis Management in Fukushima: How Commensurate Trust Emerged through Collaboration between Toyota, Nissan, Denso and Others,” IIR Working Paper WP# 18-30, March 2018

Nishiguchi, Toshihiro, “Crisis Management Under Stress: How Japanese Automakers Helped a Key Electronics Supplier After the Fukushima Disaster,” IIR Working Paper WP# 18-31, March 2018

西口敏宏「現代のオーラルヒストリー：福島におけるクライシス・マネジメント（トヨタ I）」IIR ワーキングペーパー WP#18-32, 2018年3月

西口敏宏「現代のオーラルヒストリー：福島におけるクライシス・マネジメント（トヨタ II）」IIR ワーキングペーパー WP#18-33, 2018年3月

西口敏宏「現代のオーラルヒストリー：福島におけるクライシス・マネジメント（経済産業省）」IIR ワーキングペーパー WP#18-34, 2018年3月

西口敏宏「現代のオーラルヒストリー：福島におけるクライシス・マネジメント（ルネサス）」IIR ワーキングペーパー WP#18-35, 2018年3月

西口敏宏「現代のオーラルヒストリー：福島におけるクライシス・マネジメント（日産）」IIR ワーキングペーパー WP#18-36, 2018年3月

西口敏宏「現代のオーラルヒストリー：福島におけるクライシス・マネジメント（日野自動車）」IIR ワーキングペーパー WP#18-37, 2018年3月

西口敏宏「現代のオーラルヒストリー：福島におけるクライシス・マネジメント（デンソー）」IIR ワーキングペーパー WP#18-38, 2018年3月

西口敏宏「現代のオーラルヒストリー：福島におけるクライシス・マネジメント（東京エレクトロン）」IIR ワーキングペーパー WP#18-39, 2018年3月

西口敏宏「現代のオーラルヒストリー：福島におけるクライシス・マネジメント（アプライド マテリアルズ ジャパン）」IIR ワーキングペーパー WP#18-40, 2018年3月

3. 受賞

西口敏宏・辻田素子（著）『コミュニティー・キャピタル：中国・温州企業家ネットワークの繁栄と限界』（有斐閣／2016年）が、2017年「日本ベンチャー学会清成忠男賞・書籍部門」を受賞（2017年12月）



延岡 健太郎

■ 履歴

- 1981年 大阪大学工学部卒業
- 1981年 マツダ株式会社（～1989年）
- 1988年 M.B.A.（経営学）マサチューセッツ工科大学スローン経営大学院
- 1993年 Ph.D.（経営学）マサチューセッツ工科大学スローン経営大学院
- 1994年 神戸大学経済経営研究所助教授
- 1999年 神戸大学経済経営研究所教授
- 2001年 博士（経営学）神戸大学
- 2008年～ 一橋大学イノベーション研究センター教授
- 2012年 一橋大学イノベーション研究センター長（～2018年3月）

■ 研究業績

1. 出版物

1.1. 論文, 本の1章

延岡健太郎「ビジネスケース: アイロボット ロボット掃除機『ルンバ』の革新技術」『一橋ビジネスレビュー』65巻2号, 2017年9月, 162-175頁

延岡健太郎「まえがき」一橋大学イノベーション研究センター編『イノベーション・マネジメント入門（第2版）』, 日本経済新聞社, 2017年10月, i - iv頁

延岡健太郎「価値づくりにおける課題」安本雅典・真鍋誠司（編）『オープン化戦略：境界を越えるイノベーション』, 有斐閣, 2017年12月, 341-359頁

延岡健太郎「顧客価値イノベーションによる価値づくり経営」日本政策金融公庫総合研究所（編）『日本政策金融公庫調査月報：中小企業の今とこれから』, 111号, 2017年12月, 4-15頁

1.2. その他

延岡健太郎「高くても顧客が喜んで買ってくれる『価値づくり経営』への転換を」『TKC』TKC 全国会, No. 533, 2017年6月, 36-43頁

延岡健太郎「SEDA モデルで実現する顧客価値イノベーション」『DIAMOND Quarterly』SPRING 2018, 2018年, 4-13頁

2. コンファレンス、学会発表

延岡健太郎「統合的な価値づくり：デザインエンジニアリングとアート思考」組織学会定例会, 2017年6月21日, 東京, 招待

間野茂・延岡健太郎「自律型商品に必要な製品化プロセスの変革：ロボット掃除機ルンバの事例研究」研究・イノベーション学会 第32回年次学術大会, 2017年10月28日, 京都大学吉田キャンパス, 査読有り



ジョエル・ベーカー・マレン

■ 履歴

- 1999年 ロチェスター大学経済学部卒業
- 2006年 ジョンズホプキンス大学
ポール・H・ニツツェ高等国際関係大学院修士（国際関係）
- 2006年 伊藤忠インターナショナル ワシントン
Business and Policy Research Associate（～2008年）
- 2013年 Ph.D.（経営学） ミネソタ大学カールソン経営大学院
- 2013年 一橋大学イノベーション研究センター専任講師（～2018年3月）
- 2018年～ 早稲田大学商学部准教授

■ 研究業績

1. 出版物

1.1. 論文, 本の1章

Malen, Joel and Vaaler, Paul, “Organizational Slack, National Institutions and Innovation Effort Around the World,” *Journal of World Business*, Vol. 52, Issue 6, pp. 782-797, November 2017, refereed

2. コンファレンス、学会発表

Malen, Joel, “Out of Sight, Out of Mind?: An Exploratory Study of the Role of Distance in Firm Generation of Negative Social Externalities,” International Association of Business & Society 2017 Annual Conference, June 30, 2017, Amsterdam, Netherlands, refereed



米倉 誠一郎

■ 履歴

- 1977年 一橋大学社会学部卒業
- 1979年 一橋大学経済学部卒業
- 1981年 一橋大学大学院社会学研究課修士課程修了
- 1982年 一橋大学大学院社会学研究課博士課程から一橋大学商学部産業経営研究所助手
- 1984年 一橋大学産業経営研究所専任講師
- 1988年 一橋大学産業経営研究所助教授
- 1990年 Ph.D. (歴史学) ハーバード大学
- 1995年 一橋大学産業経営研究所教授
- 1997年 一橋大学イノベーション研究センター教授 (～2017年3月)
- 1999年 一橋大学イノベーション研究センター長 (～2001年3月)
- 2003年 ソニー株式会社グローバル・ハブ・インスティテュート・オブ・ストラテジー、
コ・プレジデント (～2004年3月)
- 2008年 一橋大学イノベーション研究センター長 (～2012年3月)
- 2012年 プレトリア大学ビジネススクール (GIBS) 日本研究センター所長 (～2015年3月)
- 2015年～ プレトリア大学日本研究センター顧問
- 2017年4月～ 一橋大学名誉教授・一橋大学イノベーション研究センター特任教授
- 2017年4月～ 法政大学大学院イノベーション・マネジメント研究科教授

■ 研究業績

1. 出版物

1.1. 著書

- 米倉誠一郎『松下幸之助：きみならできる、必ずできる』ミネルヴァ書房，2018年9月，280頁
- 米倉誠一郎『イノベーターたちの日本史：近代日本の創造的対応』東洋経済新報社，2017年4月，328頁

1.2. 論文, 本の1章

- 清水洋・米倉誠一郎「イノベーションの歴史」一橋大学イノベーション研究センター編『イノベーション・マネジメント入門 (第2版)』，日本経済新聞社，2017年10月，第2章，22-49頁

1.3. その他

(書評)

- 伊原亮司『ムダのカイゼン、カイゼンのムダ:トヨタ生産システムの(浸透)と現代社会の(変容)』
/ 『週刊読書人ウェブ』，2017年8月14日，<https://dokushojin.com/article.html?i=1887>

米倉誠一郎「技術革新 余剰と余裕でイノベーション:農業革命が引き起こした産業革命」
『週刊エコノミスト』95巻33号(2017年8月29日号), 2017年8月, 36-37頁

米倉誠一郎「基調講演 未来をつくるイノベーション」『九州経済調査月報』71巻, 2017
年9月, 32-34頁

米倉誠一郎「岩崎弥太郎の事業の起こし方」『PRESIDENT』2018年2月12日号, 36-37頁

2. コンファレンス、学会発表

米倉誠一郎「イノベーションは辺境から」組織学会定例会2018丸の内, 2018年5月9日,
東京, 招待

2. 兼任研究員——2017年度

■ 岡室 博之

一橋大学大学院経済学研究科 教授

■ 楠木 建

一橋大学大学院国際企業戦略研究科 教授

■ 林 大樹

一橋大学大学院社会学研究科 教授

■ 深尾 京司

一橋大学経済研究所 教授

■ 福川 裕徳

一橋大学大学院商学研究科 教授

■ 仮屋 広郷

一橋大学大学院法学研究科 教授

3. 外国人研究員（客員）——2017年度

■ イ・サンGun LEE, Sang-Gun

Professor, Sogang Business School, Sogang University

研究テーマ「日韓の産業リンケージ効果に関する比較研究」

2017年12月13日～2018年3月31日

■ アシシュ・バラドワジ Ashish BHARADWAJ

Assistant Professor, Jindal Global Law School, O.P. Jindal Global University

研究テーマ「Licensing of Standard-essential Patents: Recent Legal Disputes & Policy Challenges in India」

2017年7月31日～2017年11月30日

■ ジャン・バティスト・マーク・リトリコ Jean-Baptiste Marc LITRICO

Associate Professor, Smith School of Business, Queen's University

研究テーマ「日本の文脈における社会運動と産業のグリーン化：環境経営実践の普及」

2017年3月1日～2017年7月31日

III. 教育活動

ER

Hitotsubashi University
Institute of Innovation Research

1

1. 講義——2017年度

IIR 教員による講義の概要は以下の通りである。

■ 大学院商学研究科の講義

1. 研究者養成コース

「イノベーション・マネジメント」秋冬学期 2 単位 軽部大

イノベーション研究と戦略論・組織論が交差する研究領域を念頭に置いて、基本的な古典から近年の英文アカデミック・ジャーナルの研究業績を可能な限り幅広く検討し、近年の研究動向に関する自分なりの鳥瞰図が作れるよう各トピックを構成する予定である。各自が進めている研究課題とジャーナルの世界における主流の研究動向との関連性や結節点を見いだす、あるいは将来的な研究課題を探索する研究戦略を検討する機会を提供したいと考えている。

「イノベーションの経済分析」秋冬学期 2 単位 中島賢太郎

本講義の目的は、イノベーションについて経済学的観点からの理解を行うことである。特に「空間」に注目した研究について注目し、これに関する近年のイノベーションに関する統計的実証研究の紹介および輪読によって、イノベーション研究についての最近の話題について理解する。

「イノベーションと戦略・組織」春夏学期 2 単位 延岡健太郎

イノベーションと戦略・組織に関する海外の一流ジャーナル論文を読み議論する。本コースの具体的な目的は2点である。第1に、イノベーションと戦略・組織について理解を深めることである。内容としては、イノベーションと戦略・組織では特に重要な、組織能力、ダイナミックケープビリティや資源のマネジメントに主に焦点をあてる。第2に、学術研究を理解して研究の実施および研究の批判ができる力を養う。バリディティの概念 (Internal, construct, external) に焦点をあてて、論文を評価する。その理解と議論のために適した、仮説実証型の研究で、数量的・統計的な処理をした論文を主に読む。イノベーションと戦略・組織をテーマとした研究（主に実証研究）の内容と研究手法を理解した上で、この領域における新たな研究テーマの可能性を探索する能力と一流論文を批判する能力を身につけることが目的である。

「イノベーションと政策・制度」秋冬学期 2 単位 江藤学

政策や制度がイノベーションに与える影響を知り、イノベーションを起こすツールとして政策や制度を使いこなしたり、新しい政策や制度を立案したりする能力を獲得し、イノベーション研究者・実務者としての基礎的素養とする。政策や制度がどのように作成され、施行され、社会を変革しているかを予測するための基礎的知識と思考能力を獲得する。

「組織間関係論」春夏学期 2 単位 西口敏宏

個人か組織かを問わず、あるシステムが、常に複雑性を増す外部環境に適應するために、内部にも同等の複雑性を維持し、これに対処していく属性が、サイバネ

ティクスにいう「最小有効多様性」である。だが、その実践は簡単ではない。なぜなら、いかに有能な個人や内部留保が豊かな企業でも、情報処理能力と利用できる資源に限りがあるため、自力だけで外部環境に匹敵する複雑性を創出・維持すること自体、不可能に近いからである。

だが、こうした不均衡な「複雑性争い」を、より効果的に闘うことは可能である。というのも、自ら（ego）の内部留保を不必要に増大させず、また、システム外からの闖入者を許すことなく、外部の他者（alter）と有効につながり、不足する資源を相補的に活用しながら、共存を可能にする賢い仕組みがあるからだ。その仕組みこそが社会ネットワークである。

本授業では、過去50年に渡り、急速に発達してきた社会ネットワーク理論の最新の成果を追い、斬新な視点から社会ネットワークを再考し、その生成、維持、消滅、再生のメカニズムを把握する。そして、各ノード（node、結節点）の資源不足を補う社会的交換を通じて、互恵的に生存していく仕組みを考究する。

こうしたネットワークによる生き残り作戦には、内部留保の絶対量よりも、むしろ、必要な時に、必要な所へ、必要なだけリワイヤリング（rewiring）、つまり、情報伝達経路の掛け直しができる「最小有効余剰」を、いかに確保できるかがカギとなる。最少有効余剰は、多すぎても負担となるが、少なすぎても肝心の時に役立たない。つまり、過不足のない諸資源のバランス管理が肝要なのである。

しかも、リワイヤリングは、それがなされたというだけでは十分ではない。より肝要なことは、特定ノードのリワイヤリングによって「遠く」から獲得された冗長性のない情報が、いかに効果的に近隣の各ノードに共有され、広くコミュニティー全体に便益がもたらされるか、さらに、そうした便益がいかに持続的に互恵交換されるかである。ここに社会ネットワーク分析（SNA）における、優れて社会学的な側面がある。

加えて、社会ネットワーク分析に特有の方法論の問題がある。分析の客観性、比較検証性を担保するために、ノード同士の関係を、同一尺度で捉える必要があるのだが、仮に1つのノードを1個人としても、現実の「人間関係」は多種多様で、御し難い。

例えば、分析対象を同じ大学の学生に限ると、太郎と花子が恋人、花子と沙織が同じサークル仲間、沙織と俊介が同じゼミ生で、しかも、各々の間に他のつながりがない場合、4人に共通する唯一の尺度は、国籍や年齢といった大まかな属性を除けば、当面、同じ大学の学生という事実でしかない。そこで彼らをそのように「限定的に」取り扱い、点（個人）同士を線で結んで「分析可能な」ネットワーク図を描く。このネットワークは、「私」、「あなた」、「彼」、「彼女」といった指標の変化に影響されない。なぜなら、4つのノードは同じ大学の学生という同一尺度でのみ測られ、性別や恋人同士といったその他の属性や特異な関係は無視されるからだ。こうしてロバスト（頑健）な分析が可能となる。少なくとも理論的には、だ。

だが、同一尺度（commensuration）と指標（indexicality）問題がこのように「解決された」扱いやすいデータは、多くの場合、薄っぺらで凡庸な知見しか産み出さない。逆説的だが、方法論的に、より精緻で完璧を期すほど、つまらない分析結果しか出てこない。なぜなら、絞り込まれすぎた同一尺度では、決して捉える

このできない豊かな現実の営みが、「不都合な真実」として一方的に棄却されてしまうからだ。

Watts 等の数値シミュレーションによるスモールワールド研究 (1998) によって、凝集性の高いクラスター間に、わずか数本のリワイヤリングをしてやるだけで、ローカルな凝集性を保ったまま、グローバルな経路長が劇的に縮まり、ネットワーク全体の情報伝達特性が著しく向上することが、シミュレーションで数学的に立証され、世界中に旋風を巻き起こした。さらに、Watts 等のアプローチに欠如していた階層性をモデルに織り込んだ「玉ねぎ構造 (onion structure)」論も近年注目されている。

だが、そうした数値シミュレーションに基づく理論の社会ネットワークへの応用を試みた今世紀初頭の研究の進展を見ると、同一尺度で「無難に使えた」のは、せいぜい科学論文か特許出願の「共著者関係」データ位しかなく、方法論的に問題なくとも、有用な知見がなかなか導出されないことに、多くの識者は失望した。さらに、「個人資産」としての技能や学歴などを扱う Becker (1964) らのヒューマン・キャピタル論では、「社会関係」を扱うネットワーク分析には適さず、他方、社会全体に行き渡る一般習律を扱う Putnam (1993, 2000) らのソーシャル・キャピタル (社会関係資本) の考え方は、例えば、東日本大震災後に国民の多くが示した自律的な協力関係を理解できても、傑出した個別企業や、地域経済のネットワーク分析には、あまりに茫漠としており、その適用性にギャップがあることも指摘された。

そうした諸問題への方法論的な対応として、「個人」でも「社会全体」でもなく、その中間項として、特定のメンバーシップによって明確に境界が定まる「コミュニティ」を分析単位とし、そのメンバー間でのみ共有され利用され得るコミュニティ・キャピタルの考え方が、有力なオルターナティブとして浮上する。こうした「中範囲の」分析レベルは、上述の「不都合な真実」ばかりでなく、同一尺度や指標の問題にもリーズナブルに対応可能で、分析上、有用性が高い (西口・辻田 2016『コミュニティ・キャピタル—中国・温州企業家ネットワークの繁栄と限界』中小企業研究奨励賞本賞受賞)。

拙著『遠距離交際と近所づきあい』(2007) で詳述したトヨタのサプライチェーンや中国・温州人企業家の世界的ネットワークは、コミュニティ・キャピタルに依拠する新たな社会ネットワーク分析の先取的な事例であり、近年、ビッグデータ一辺倒の観のある米国の定量分析を補完する意味で、徹底したフィールド調査に基づく定性的観察が最も得意とする詳細な実証的知見を提供した。

この研究によって、トヨタ系では、サプライチェーンのすべてのノード間が「前工程=サプライヤー・後工程=カスタマー」関係という同一尺度でスケールフリーにつながる「フラクタル連鎖」を形成する一方で、約2割の選良サプライヤーが構成する自主研究会 (自主研) が、通常取引関係とは異次元のリワイヤリングによって、スモールワールド効果を発揮していることが確認された。

他方、中国では、温州語という特殊な方言を持ち、強固で排外的な社会的凝集性を示す温州人のうち、やはり人口の2割を占める「離郷人」が、適度にランダムな動きをしながら、国内外にある「遠く」のオイシイ情報を適時にコミュニティ仲間にもたらし、双方で緊密に連携しながら、他に先んじて新市場を開拓し、

コミュニティ全体に繁栄をもたらしていること、さらに、こうした構造優位の基盤には、血縁・同郷という確固たる同一尺度に基づく強靱な信頼関係が認められた。

トヨタ系列のフラクタル連鎖であれ、温州企業家間の血縁・同郷関係であれ、そうした同一尺度に依拠する成員間には、「同一尺度の信頼」(commensurate trust)が醸成され、ネットワーク分析、コミュニティ運営ともに、予測と制御の可能性が増す。

このように、コミュニティ・キャピタルという新たな中範囲の概念は、厳格な方法論の追究によって一方的に切り捨てられ、その存在すら忘れられがちであった不都合な(とはいえ、研究上、実践上、必須の)真実に再び光を当て、より豊かでバランスの取れた知見の導出に役立つ。

上述の素描からも明らかなように、本講義における新たなネットワーク理論の探究は、コンピューター・シミュレーションに偏し、あるいは、共著者関係等の単純な指標でネットワーク図を描く因習的な分析とは、一線を画している。むしろ、そうした既存の成果を批判的に摂取しながら、近年、分析技術が飛躍的に向上しつつある最新ネットワーク研究の動向を探り、社会システム論、ソーシャル・キャピタル論の視点も織り込みながら、考察を深める。こうした挑戦的な作業には、通説に囚われず、自分の頭で徹底的に考え抜く思考力と、実践への強い関心が求められる。

「ネットワーク組織論」 秋冬学期 2 単位 中島賢太郎

企業や組織はその内外で様々なネットワークを持っている。例えば、企業の間では製品の取引関係などのネットワークが形成されている。また企業の内部でも、組織間、あるいは組織に所属する個々人同士のコミュニケーションや情報共有ネットワークが形成されている。本講義の目的は、このような組織内外におけるネットワークの構造、またそれが組織のパフォーマンスに果たす役割について総合的に理解することである。

"Institutional Environment of Innovation" 秋冬学期 2 単位 Joel B. Malen

This course introduces students to management research addressing how firm innovation activities are influenced by the institutional environment. The ability to develop and commercialize new ideas has clear salience to firm competitiveness. Accordingly, both managerial practitioners and academics devote substantial efforts toward understanding innovation processes, strategies and outcomes. Nonetheless, while an extensive body of management research focuses on innovation activities taking place within firms and among individuals, the range of forces influencing the innovation process extends far beyond this focus. Specifically, inventors and firms are embedded in an external environment that creates both incentives for and challenges to the entire innovation process. For example, institutions provide resources such as scientific knowledge, financing and training that make innovation possible. At the same time, government regulations and societal expectations create both incentives as well as constraints on the level and types of efforts individuals and firms make toward innovating. In this sense, the

external environment plays an influential role on the decisions individuals and firms make, the resources they have to innovate and the determinants of innovation success. This course, therefore, flips the management perspective from an inward looking approach directed inside the firm to an externally oriented approach focused on the firm's external environment. The successful development and commercialization of new technologies is the result of an extensive and complicated process requiring contributions of both private and public actors operating at multiple levels of analysis and constrained by institutions both within and outside the firm. In order to place some structure on this vast intellectual terrain, the bulk of the course is loosely organized around four areas: the role of government, societal pressures, competition and industry, firm-level responses. Through these broad topics, we will take a holistic approach to the innovation process to better understand the institutional conditions influencing the innovation process. At the same time, the course will also attend to sources of variation in the institutional environment. Environments themselves are often different-either across geographic locations or with respect to the types of innovation and related activities taking place in a given location-and understanding these differences is critical to effective analysis and understanding of the institutional environment of innovation. We will examine fundamental and contemporary approaches being applied to the subject of institutional influences on firm innovation processes as well as a number of relevant extensions. The class will be oriented toward exploring theoretical perspectives as well as reviewing empirical papers to provide students with insights into how researchers attempt to document important relationships and processes associated with innovation and technology development.

「イノベーションと経営・経済・政策」

春夏学期 2 単位 青島矢一、江藤学

科学技術イノベーション・システム（科学技術及びイノベーションのプロセス、メカニズム、効果等）を社会科学の側面から俯瞰的にとらえるための講義。
イノベーション研究の全体像及び各論の基礎的な知識を身に着ける。

「イノベーション研究方法論」

春夏学期 2 単位 青島矢一、江藤学

科学技術イノベーション・システムの社会科学的研究に必要とされる、定量的、定性的方法論を習得するための講義。
イノベーションの研究方法論についての基礎的な概念、視点、理論などを身に着けることを目的とする。

「先端科学技術とイノベーション」 秋冬学期 2 単位 青島矢一

経済社会への影響を考慮せずに現実性のある研究を行うことは難しくなっている。政策立案に関係する研究であれば、それはなおさらのことである。社会学者であっても現実社会に有益な知見をもたらす研究を行うためには、自然科学の発展を深く理解することが必要である。そこで本授業では、社会に大きな影響を

与えてきた、また、与えつつある先端科学技術の重要領域を4つから5つとりあげて、最先端のイノベーションの事例を紹介するとともに、その社会科学的な意義を議論する。

「イノベーションリサーチセミナーⅠ」春夏学期2単位 青島矢一、江藤学

「イノベーションリサーチセミナーⅡ」秋冬学期2単位 青島矢一、江藤学

「演習」通年6単位

延岡健太郎、青島矢一、中島賢太郎、軽部大、カン・ビョンウ、清水洋、Joel B. Malen

2. MBA コース

「経営組織」秋冬学期2単位 青島矢一

企業は、変化の激しい外的環境に効果的かつ効率的に適応する組織的仕組みを構築すると同時に、内部の人々から組織目標達成に必要なエネルギーを引き出す必要がある。こうした外的環境への適応と内的人材への働きかけの微妙なバランスをはかることが、組織マネジメントにとって重要なことであり、そのために必要となる、様々な組織の理論や経営技法を提供することがここでの目的である。個人の動機付けに関わるミクロの組織論から、組織の設計や環境・制度との関わりを扱うマクロの組織論にいたるまでをカバーしながら、組織を運営するマネジャーとして必要なスキルを学んでいく。

「戦略分析」秋冬学期2単位 軽部大

企業戦略にまつわる書籍や文献は、巷にあふれている。しかしながらその多くは、成功事例を「後付け的に」解釈・整理したものである。背後に存在する「共通の成功（失敗）の原理」にまで言及することは希である。

本講義では表層的に現象をなぞるのではなく、背後の戦略行動や戦略志向性を生み出す組織の問題にまで立ち入って、受講者の戦略的思考法と分析手法の双方を向上させることを目標とする。具体的には、企業の戦略行動の〈分析・評価・意思決定〉に必要となる分析フレームワークと分析技法に焦点を当てる。

レベルは、一般的なMBAで教えられる標準的なレベルを想定している。授業は、「頭出しの講義」と「ケース討議」を基本セットとして進められる。

戦略・企画職能のマネジャーが最低限知っておくべき経営戦略の基本的なフレームワークとそれに基づく分析技法に焦点を当てた講義を行う。〈フレームワーク講義→ケース分析→意思決定オプションの創出・評価〉という一連の作業を通じて、分析的な論理の組み立て方とそれを論理的に裏付けるデータ収集・加工法を習得し、最終的に戦略的行動の背後の論理を分析する「眼」と「スキル」を養うことを目的とする。

「技術戦略」秋冬学期2単位 延岡健太郎

製造企業の技術・商品戦略について、その理論と応用をクラス内で議論する。主なテーマは、製造企業の経営戦略、商品開発の戦略とマネジメント、顧客価値創

出、機能的価値と意味的価値、デザインマネジメント、コア技術戦略、研究開発マネジメント、部品調達戦略、CAD・CAE、プロジェクトマネジメントなどである。競争が厳しく、不確実性が高い中での、技術戦略のあり方について、考える力と実行する力を高める。

「ワークショップ：経営D（企業・産業）」 通年6単位 清水洋

「ワークショップ：イノベーション」 通年6単位 延岡健太郎

3. シニアエグゼクティブプログラム

新第16クール

青島矢一（共同講義）：

セッション2：「戦略を見る目」 2017年10月19日

セッション3：「戦略と組織を見る目」 2017年11月30日

セッション5：「経営の総合判断」 2018年3月9日

4. EPSON（経営リーダー育成プログラム）

青島矢一

第4クール

2017年10月6日・7日

■ 商学部の講義

「イノベーション・マネジメント」 春夏学期2単位 西口敏宏

授業各回が綿密に連関する本講義では、履修生に一定の集中とコミットメントが求められる。「教」とともに「育」も重視し、履修生1人1人が通説にとらわれず、自らの思考力を活かして考え抜き、実践に役立つ教訓を導出する手助けになることを企図する。

本講義では、広義のイノベーション（経済価値をもたらす革新）の観点から、最新のネットワーク理論に基づき、優れたパフォーマンスを継続して生み出すイノベーティブな組織能力、生産システム、サプライチェーン、政府改革の仕組み等について、豊富な証拠をもとに実証的に議論する。講義形式で基本的な概念や理論を紹介するとともに、最新の事例を用いて、それらを応用する機会を提供する。

「ビジネス・エコノミクス入門」 春夏学期2単位 中島賢太郎

この講義は、経済学を学んだことのない商学部の学生を対象とした、経済学についての入門講義である。特に企業を取り巻く市場環境の理解に重要であるマイクロ経済学の基礎を中心に解説する。また、市場環境を理解する観点から、一部マクロ経済学の基礎についての議論も行う。

"Interactive Course on Business Basics (Management)" 春学期 2 单位 Joel B. Malen

The Interactive Course on Business Basics builds on and further develops key concepts and issues relevant to the management of organizations presented in the first-year Introduction to Management course (経営学概論). The purpose of this course is to enable students to more effectively recognize, understand and respond to some common challenges that practicing managers confront. Although some new material will be presented in the class, the emphasis is strongly on application of concepts and frameworks. In line with the interactive format, substantial class time will be devoted to discussion, case analysis, in-class exercises and student presentations. Actively engaging with the material in the classroom is intended to provide students with a clearer sense of how fundamental managerial activities that they have previously encountered conceptually translate into the actual practice of running a firm. The course material is organized around four primary functions that managers perform within the firm: planning, organizing, leading and controlling. Each of these functions is explored in greater depth through relation to topics students have previously covered, such as strategic planning or marketing. A common feature of real-world management is that successfully performing any of the primary functions or specific tasks associated with those functions often requires consideration of the effects that changes and strategies will require or precipitate throughout the organization. Accordingly, through application of the material to real world examples, students will develop an appreciation for how topics they have previously studied influence real world organizations both directly and in conjunction with other functions, and components of the organization. Understanding how the different pieces of the organizational puzzle fit and, more importantly, work together will enable students to develop a more holistic understanding of the organization and the functions managers must perform within it.

"Advanced Course in Management" 春学期 2 单位 Joel B. Malen

Advanced Topics in Commerce and Management I: Environmental Management and Strategy

Today, firms around the world are increasingly being held to account for the impact that their business activities have on the natural environment. Global warming, the accumulation of toxins in the environment, the recycling of material waste are just a few of the myriad issues for which firms' customers, governments and other stakeholders are demanding action. These demands create both challenges and opportunities for businesses. The objective of this course is to provide students with effective tools for managing the firm in context of increasing societal demands to improve environmental performance. The course will make extensive use of case studies related to the impact of business activities on the natural environment. At the end of the course, students will be able to 1. recognize how business activities affect the natural environment; 2. identify challenges and opportunities that those impacts create for firms and 3. develop management strategies capable of effectively addressing a range of environmental issues.

「前期ゼミナール（英書講読）Ⅰ」 春夏学期 2 単位 中島賢太郎、カン・ビョンウ
「前期ゼミナール（英書講読）Ⅱ」 秋冬学期 2 単位 中島賢太郎、カン・ビョンウ
「導入ゼミナールⅠ」 春夏学期 2 単位 西口敏宏、カン・ビョンウ
「導入ゼミナールⅡ」 秋冬学期 2 単位 江藤学
「演習」 通年 4 単位 青島矢一、軽部大、中島賢太郎、清水洋

2. イノベーションマネジメント・政策プログラム——2017年度

■ 概要

イノベーションマネジメント・政策プログラム (Innovation Management and Policy Program: IMPP) は、経営学や経済学を中心とする社会科学の知識を身につけながら、①イノベーションのマネジメント、または、イノベーションを促す政策形成や制度設計に関連するテーマで独自の研究論文を仕上げ、学術的なフロンティアを開拓するとともに、②民間組織におけるイノベーションのマネジメントや公的機関における科学技術イノベーション政策の形成に対して適切かつ重要な影響力をもちうる研究人材を養成することを目的とした、博士レベルのサーティフィケートプログラムである。日本および国際社会がイノベーションを生み出す能力を強化もしくは向上させる上での学術的基盤を担う人材の育成を行う、教育（教員からの学術的知識の習得）と研究（教員との研究の実施）が一体化したプログラムとなっている。

本プログラムは、文部科学省科学技術イノベーション政策における「政策のための科学」基盤的研究・人材育成拠点事業（領域開拓拠点）による補助を受け運営している。

■ 受講者

本プログラムには、一橋大学大学院博士課程に所属する学生その他、他大学の博士課程の学生、ポストドクトラルフェロー、その他、社会人を含む修士課程修了者（もしくは、修士課程修了に相当する者）が参加可能であり、カリキュラムは、水曜日の夜と土曜日開講の授業、夏期の集中講義を中心に構成されている。

本プログラムを修了するには、「イノベーションリサーチセミナー」、「必修科目」(3科目)、「選択必修科目」(2科目)の受講に加えて、論文2本の提出が必要となる。

■ 実績

2017年度在学学生 26名

	2016年度入学	2017年度入学
社会人学生	4名	5名
一橋大学博士後期課程学生	2名(1名)	3名(1名)

() 内は商学研究科の学生

■ 2017年度の主な行事

7月9日から	【学会発表(学生2名)】
7月13日	PICMET '17 Conference 会場: Portland Marriott Downtown Waterfront, Portland, Oregon, USA
8月20日から	SciREX 拠点間合同サマーキャンプ 2017
8月22日	会場: 政策研究大学院大学
8月23日から	IIR サマースクール 2017
8月24日	会場: 一橋大学 佐野書院
10月28日から	【学会発表(学生7名)】
10月29日	研究・イノベーション学会 第32回年次学術大会 会場: 京都大学 吉田キャンパス
3月29日	地域イノベーション事例研究報告会 会場: 政策研究大学院大学 (GRIPS)

■ 講義

必修科目

「イノベーション研究方法論」春夏学期 2 単位

青島矢一／江藤学

科学技術イノベーション・システムの社会科学的研究に必要とされる、定量的、定性的方法論を習得するための講義を行う。

「イノベーションと経営・経済・政策」春夏学期 2 単位

青島矢一／江藤学

科学技術イノベーション・システム（科学技術及びイノベーションのプロセス、メカニズム、効果等）を社会科学の側面から俯瞰的にとらえるための講義を行う。

「先端科学技術とイノベーション」秋冬学期 2 単位

青島矢一

社会学者と最先端の技術者・研究者の組み合わせによるオムニバス形式の講義を行う。4モジュール（①先端材料領域・②先端医療領域・③IoT 領域・④エネルギー領域）から構成される。

「イノベーションリサーチセミナーⅠ」春夏学期 2 単位

青島矢一／江藤学

関係教員全員参加による集中演習。分野横断的な視点から研究指導を行う。

「イノベーションリサーチセミナーⅡ」秋冬学期 2 単位

青島矢一／江藤学

関係教員全員参加による集中演習。分野横断的な視点から研究指導を行う。

選択必修科目は商学研究科（研究者養成コース）と共通（Ⅲ -1. 参照）

「イノベーションの経済分析」秋冬学期 2 単位 中島賢太郎

「イノベーション・マネジメント」秋冬学期 2 単位 軽部大

「イノベーションと政策・制度」秋冬学期 2 単位 江藤学

IV. 研究成果および刊行物



1. 一橋ビジネスレビュー——2017年度

イノベーション研究センターでは、研究成果の外部への報告として、機関誌『ビジネスレビュー』を年4回発刊してきたが、経営学とビジネスの現場を結ぶ日本発の本格的経営誌をめざして、2000年9月に『一橋ビジネスレビュー』（東洋経済新報社発行）としてリニューアルした。特集論文、経営学最先端のコラム、本格的なビジネス・ケース、経営者インタビューを掲載、最新の経営理論、経営手法の分析など、経営学の最先端の動きを初心者にもわかりやすい形で提示するよう心がけている。編集委員には一橋大学の教員のほか、他大学の研究者も含まれ、さらには外部企業からも編集顧問を迎えて、現場での実情を加味した内容となっている。

■ 本誌の特色

本誌は、経営学、イノベーション研究分野の研究者、学生、MBA、知的ビジネスパーソンなどを対象とし、以下のような点を特徴とする。(1) 大学の学問と現実のビジネスをつなぐために、知的挑戦と創造的対話の場を提供する、(2) 経営学者等の論文、ケース・メソッドを読むことで経営を考える力を養う、(3) 最新の日本企業のケース・スタディを毎号提供する、(4) 学生、MBAのために経営学のイノベーションの系譜をわかりやすく解説する。また、2007年度よりフロア参加者を募り、年1回程度、「一橋ビジネスレビュー・フォーラム」を開催。第一線で活躍している変革リーダー、経営者、専門家を招いての講演、パネルディスカッションを行っている。今年度は、「これからの日本の戦い方を問う：組織はいかに変わるか」と題して開催された。

■ 編集顧問

野中郁次郎（一橋大学名誉教授）

柳井正（株式会社ファーストリテイリング代表取締役会長兼社長）

山海嘉之（筑波大学教授／サイバニクス研究センター長／サイバーダイナ株式会社 CEO）

■ 編集委員

学内

米倉誠一郎（委員長） 青島矢一 和泉章 江藤学 大山睦 加賀谷哲之 加藤俊彦
 軽部大 カン・ビョンウ 楠木建 島貫智行 清水洋 J. B. Malen 中島賢太郎 中野
 誠 西口敏宏 沼上幹 延岡健太郎 林大樹 藤川佳則 藤原雅俊 松井剛 鷺田祐一

学外

浅川和宏（慶應義塾大学） 浅羽 茂（早稲田大学） 糸久正人（法政大学） 栗木 契（神戸大学） 國領二郎（慶應義塾大学） 榊原清則（中央大学） 清水勝彦（慶應義塾大学）
 鈴木竜太（神戸大学） 武石 彰（京都大学） 長岡貞男（東京経済大学） 楡井 誠（東京大学） 藤本隆宏（東京大学） 守島基博（学習院大学） 米山茂美（学習院大学） M. Cusumano（マサチューセッツ工科大学 米国） M. Kenney（カリフォルニア大学デービス校 米国） 李 亨五（淑明女子大学校 韓国） 徐 正解（慶北大学校 韓国）



■『一橋ビジネスレビュー』 第65巻1号 2017年6月

○特集「ノーベル賞と基礎研究」

2016年、大隅良典氏がノーベル賞生理学・医学賞を受賞した。日本出身のノーベル賞受賞者は3年連続で誕生し、日本の科学水準に対する称賛の声が上がっている。その一方、ノーベル賞は20~30年前の研究成果を今になって評価しているにすぎず、今日の大学・研究機関・企業を取り巻く状況から将来の科学技術の先行きを憂う声もある。「世の中の役に立たない」とも言われながら、科学に対するファンダメンタルな問いを明らかにしようとする基礎研究はなぜ必要なのか。ノーベル賞受賞者の分析やインタビュー、政策的背景、基礎研究の状況やその効果に関する解析から、ノーベル賞を切り口に基礎研究の意義を多面的に明らかにする。

基礎研究の状況やその効果に関する解析から、ノーベル賞を切り口に基礎研究の意義を多面的に明らかにする。

○特集論文

赤池伸一／原泰史「日本の政策的な文脈から見るノーベル賞」

原泰史／壁谷如洋／小泉周「ノーベル賞受賞者の特性分析から見える革新的研究の特徴」

齋藤裕美／牧兼充「スター・サイエンティストが拓く日本のイノベーション」

小泉周／調麻佐志「大学の研究力をどのように測るか？」

チャ・ドゥウォン「基礎研究重視へと変化する韓国：科学技術イノベーション政策の現状分析」

安田祐祐「5つの『なぜ？』でわかるノーベル経済学賞」

○経営を読み解くキーワード 石井裕明「パッケージ」

○連載

井上達彦「ビジネスモデルを創造する発想法 (4)：ビジネスの『当たり前』を疑う」

○ビジネス・ケース

露木恵美子／前田雅晴「こころみ学園／ココ・ファーム・ワイナリー：人が『働くこと』の意味を問い直す：知的障害者支援施設の挑戦」

青島矢一／山崎邦利「土湯温泉：再生可能エネルギーを活用した地域復興」

○マネジメント・フォーラム /インタビュー 米倉誠一郎・赤池伸一・原泰史

野依良治（科学技術振興機構 研究開発戦略センター長）

「志ある若者を魅きつける『知の共創エコシステム』の創生を」

○コラム連載

稲水伸行「クリエイティビティの経営学 (3)：クリエイティブ人材のマネジメントと落とし穴」

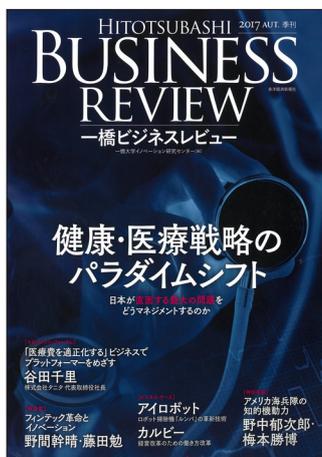
○投稿論文

近能善範「顧客との取引関係とサプライヤーの成果：日本の自動車部品産業の事例」

○私のこの一冊

神吉直人「研究と教育、両立の果実：内田樹『私家版・ユダヤ文化論』」

大藪恵美「理論に支えられた経済小説集：大藪治夫『小説集 カレンシー・レボリューション』」



■『一橋ビジネスレビュー』 第65巻2号 2017年9月

○特集「健康・医療戦略のパラダイムシフト」

高齢化率の上昇と人口減少が進むわが国が直面する課題は多い。複雑な課題が山積する健康・医療（ヘルスケア）領域では、多くの調査研究や実践が行われている。それらの貴重なデータや経験の蓄積が必要なことは言うまでもない。

2014年に国が策定した「健康・医療戦略」は、わが国を「課題解決先進国」として位置づけるという新たな発想を提示した。本特集では、同戦略のねらいや沿革、今後の方向性などを整理し、主要な論点を検討する。あわせて、わが国の医療機関の経営戦略や医療管理学の現状を海外と比較しながら紹介する。

○特集論文

池田陽平「健康・医療戦略で変わる日本」

北沢真紀夫「病院経営：その実態と処方箋」

森山美知子「医療保険者の機能強化と医療提供者とのコラボレーションの構築」

等々力英美「地域を巻き込む食育とヘルスプロモーション：沖縄における食による長寿再生」

林大樹「健康・医療戦略に先行するイノベティブな企業のビジネスモデル」

阪口博政「日本における医療管理学の展開：医療管理学の変遷と教育プログラムの特徴・課題」

○特別寄稿

野中郁次郎／梅本勝博「アメリカ海兵隊の知的機動力：組織的知識創造論から二項動態論へ」

○「技術経営のリーダーたち」(30) /インタビューア 延岡健太郎・青島矢一

川瀬忍（ヤマハ株式会社 常務執行役 楽器・音響生産本部長）

「アナログとデジタル、感性とインテリジェンスを同時に追求する」

○経営を読み解くキーワード 永山晋「創造性」

○連載

野間幹晴／藤田勉「フィンテック革命とイノベーション (1)：AI革命で進化するフィンテック」

井上達彦「ビジネスモデルを創造する発想法 (5)：美しい『経験価値』を生み出す」

○ビジネス・ケース

間野茂／延岡健太郎「アイロボット：ロボット掃除機『ルンバ』の革新技術」

浅井俊克／木村めぐみ「カルビー：経営改革のための働き方改革」

○コラム連載 稲水伸行「クリエイティビティの経営学 (4)：クリエイティビティを育む職場風土とは」

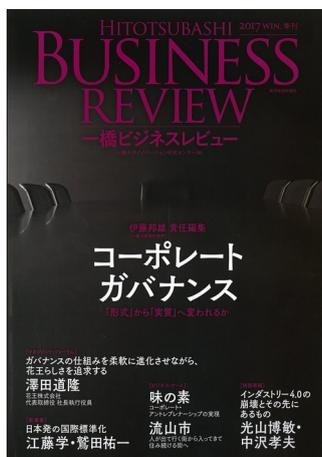
○マネジメント・フォーラム /インタビューア 米倉誠一郎

谷田千里（株式会社タニタ 代表取締役社長）『「医療費を適正化する」ビジネスでプラットフォーマーをめざす』

○私のこの一冊

玉田俊平太「ギリギリにならないための投資術：バートン・マルキール『ウォール街のランダム・ウォーカー（原著第11版）』」

原泰史『ライク・ア・ローリング・ストーン：くるり・宇野維正『くるりのこと』』



■『一橋ビジネスレビュー』 第65巻3号 2017年12月

○特集「コーポレートガバナンス」

伊藤レポート、スチュワードシップ・コード、コーポレートガバナンス・コードを契機に、日本企業のコーポレートガバナンス改革が進められている。とはいえ、ややもすると形式的な対応にとどまり、資本生産性を実質的に上げ、企業価値創造を持続的に高める取り組みに結びついていないケースも散見される。本特集では、コーポレートガバナンス改革で何が変わり、何が課題として残っているのかをさまざまな観点から検証し、今後の日本企業のグローバル競争力の向上に結びつけるためのカギを探る。

○特集論文

伊藤邦雄「コーポレートガバナンス改革のPDCA:何を企図し、何が変わり、今後の課題は何なのか」

武井一浩「ガバナンスの実質化をめぐる諸論点」

スコット・キャロン／吉田憲一郎「日本のコーポレートガバナンス改革の進捗と今後の課題」

朱殷卿「M&A 戦略における規律：自律的なコーポレートガバナンスのための基本」

伊藤邦雄／加賀谷哲之／鈴木智大／河内山拓磨「日本におけるガバナンス改革の『実質的』影響をめぐると実証分析」

花崎正晴「日本型コーポレートガバナンス構造の再検討：市場競争の規律づけメカニズムの検証」

○特別寄稿 光山博敏／中沢孝夫「インダストリー4.0の崩壊とその先にあるもの」

○「技術経営のリーダーたち」(31) /インタビュー 延岡健太郎・青島矢一

對馬哲平（ソニー株式会社 新規事業創出部 wena 事業室統括課長）

「新入社員のアイデアと情熱、行動力が突き動かした大企業発のイノベーション」

○連載 江藤学／鷺田祐一「日本発の国際標準化 戦いの現場から (1):大成プラス『ナノモールドィング技術』」

野間幹晴／藤田勉「フィンテック革命とイノベーション (2):進化する電子決済技術」

井上達彦「ビジネスモデルを創造する発想法 (6):大きな『飛躍』をもたらす着実なサイクル」

○ビジネス・ケース

孫康勇／内田大輔／高橋裕典「味の素：コーポレート・アントレプレナーシップの実現」

木村篤／酒巻徹／治部れんげ「流山市：人が出て行く街から入ってきて住み続ける街へ」

○マネジメント・フォーラム /インタビュー 伊藤邦雄

澤田道隆（花王株式会社 代表取締役 社長執行役員）「ガバナンスの仕組みを柔軟に進化させながら、花王らしさを追求する」

○コラム連載 稲水伸行「クリエイティビティの経営学 (5):クリエイティビティを育む職場風土は人によって異なるのか? :日本のビジネスパーソン3000人の調査より」

○投稿論文 榎波龍雄／田路則子「アーキテクチャ進化における製品開発マネジメント」

○私のこの一冊

山崎繭加「日本企業の真の姿と正しい処方箋：平野正雄『経営の針路』」

生稲史彦『「研究するとは?」を考える素材：山下和美『天才柳沢教授の生活』』



■『一橋ビジネスレビュー』 第65巻4号 2018年3月

○特集「次世代産業としての航空機産業」

航空機産業は、日本の次世代産業の1つの核として期待されている。世界経済の成長、特に途上国の経済発展がもたらす持続的な輸送需要の増大に伴い、今後、航空機市場の拡大が予測される。初の国産ジェット機MRJや躍進するホンダジェットなど、話題も多い。航空機産業の特徴は裾野の広さにある。産業の成熟が指摘される日本においては、経済への波及効果のみならず、新技術開発の起爆剤となる可能性を秘めている。本特集では、航空機産業の各分野のリーダーに登場していただき、この産業の転換期を描写するとともに、新たな技術展開、産業発展の可能性と課題、日本経済や地域振興への波及などを議論する。

○特集論文

鈴木真二「航空機産業を俯瞰する：ジェット旅客機を例として」

洪武容「航空機産業をめぐるビジネス」

岩宮敏幸／大貫武／白水正男「日本の航空技術と国際競争力」

伊藤一彦／佐倉潔／小林真一／田浦伸一郎「MRJの取り組み：課題と展望」

西村剛「新世代機導入による経営システムのイノベーション：OperatorからCo-creatorへの挑戦」

杉山勝彦「航空機産業における中小企業の挑戦」

○「技術経営のリーダーたち」(32) /インタビューア 延岡健太郎・青島矢一

並木文春（株式会社III 理事 宇宙開発事業推進部長）

「日本の宇宙航空事業を成長軌道に乗せる」

○連載

江藤学／鷲田祐一「日本発の国際標準化 戦いの現場から (2)：生活支援ロボットの国際標準化」

野間幹晴／藤田勉「フィンテック革命とイノベーション (3)：仮想通貨の多様化と技術革新」

井上達彦「ビジネスモデルを創造する発想法 (7)：肝心なものは描かない：ziba tokyo 平田智彦による『ホワイトスペース』のすすめ」

○ビジネス・ケース

軽部大／内田大輔「富士メガネ：ビジョンが未来を切り拓く」

加藤崇徳「エア・ウォーター：M&Aによる事業ポートフォリオ構造の転換」

○第17回 ポーター賞 大藪恵美「ポーター賞受賞企業に学ぶ」

○マネジメント・フォーラム /インタビューア 米倉誠一郎

藤野道格（ホンダ エアクラフト カンパニー 社長兼 CEO）「事業化の道をこじ開けて戦略的に価値創造に挑む」

○コラム連載 稲水伸行「クリエイティビティの経営学 (6)：クリエイティビティを育むオフィスはどのようなものか？：日本のビジネスパーソン3000人の調査より」

○トピックス

本誌編集顧問・野中郁次郎名誉教授がハース・ビジネススクールの「生涯功労賞」を受賞

2. ワーキングペーパー——2017年度

イノベーション研究センターでは、個人または共同研究の過程で明らかになった最新の成果をワーキングペーパーとしてタイムリーに発表している ([http://pubs.iir.hit-u.ac.jp/ja/pdfs/index?did\[\]=2&cid\[\]=6&cid\[\]=7&s=dd&ppc=20](http://pubs.iir.hit-u.ac.jp/ja/pdfs/index?did[]=2&cid[]=6&cid[]=7&s=dd&ppc=20))。

- WP#17-05 原泰史・吉岡（小林）徹・蘆澤雄亮「グッドデザイン賞の研究用データベースの概要とその利用」2017年4月
- WP#17-06 西口敏宏・辻田素子「東日本大震災後のルネサス支援——同一尺度の信頼が生まれた」2017年5月
- WP#17-07 木村めぐみ「表現する組織 創造的進化と創造的転回」2017年5月
- WP#17-08 木村めぐみ「創造的転回 知識についての知識の改善運動とその変遷」2017年5月
- WP#17-09 木村めぐみ「英国における創造的転回 『創造的な英国』の「新しい労働」」2017年5月
- WP#17-10 木村めぐみ「英国政府における創造的転回 官僚制と創造性」2017年5月
- WP#17-11 木村めぐみ「英国映画産業における創造的転回 クリエイティブ産業の20年」2017年5月
- WP#17-12 木村めぐみ「創造的転回の実践 芸術・人文学とイノベーションの再現性」2017年5月
- WP#17-13 木村めぐみ「デザインの役割としての創造的転回 描写されたイノベーションと体験されたイノベーション」2017年5月
- WP#17-14 Shimizu, Hiroshi and Naohiko Wakutsu, “Spin-Outs and Patterns of Subsequent Innovation: Technological Development of Laser Diodes in the US and Japan,” August 2017
- WP#17-15 Kang, Byeongwoo, Heikki Rannikko and Erno T. Tornikoski, “How a Laid-off Employee Becomes an Entrepreneur: The Case of Nokia’s Bridge Program,” December 2017

- WP#18-01 福田一史・井上明人・嶋原盛之・清水洋・山口翔太郎・黄巍「川口洋司第1回インタビュー前半：ゲーム雑誌の出版に携わるまで」2018年1月
- WP#18-02 福田一史・井上明人・嶋原盛之・清水洋・山口翔太郎・黄巍「川口洋司第1回インタビュー後半：家庭用ゲーム雑誌の先駆け」2018年1月
- WP#18-03 嶋原盛之・黄巍・山口翔太郎「川口洋司第2回インタビュー前半：「Beep」時期の仕事」2018年1月
- WP#18-04 嶋原盛之・黄巍・山口翔太郎「川口洋司第2回インタビュー後半：「BEEP！メガドライブ」時期の仕事」2018年1月
- WP#18-05 Bharadwaj, Ashish and Byeongwoo Kang, “How Does Innovation Occur in India? Evidence from the JIRICO Survey,” January 2018
- WP#18-06 嶋原盛之・福田一史・黄巍・井上明人「川口洋司第3回インタビュー前半：「セガサターンマガジン」時期の仕事」2018年2月
- WP#18-07 嶋原盛之・福田一史・黄巍・井上明人「川口洋司第3回インタビュー後半：オンラインゲーム事業への転身」2018年2月
- WP#18-08 生稲史彦・井上明人・嶋原盛之・山口翔太郎「仁井谷正充第1回インタビュー前半：数学とコンピュータ」2018年2月
- WP#18-09 生稲史彦・井上明人・嶋原盛之・山口翔太郎「仁井谷正充第1回インタビュー後半：コンパイルの創業」2018年2月
- WP#18-10 生稲史彦・井上明人・福田一史・金東勲・中村彰憲・嶋原盛之・山口翔太郎「岩谷徹第1回インタビュー前半：生い立ちから大学入学まで」2018年2月
- WP#18-11 生稲史彦・井上明人・福田一史・金東勲・中村彰憲・嶋原盛之・山口翔太郎「岩谷徹第1回インタビュー後半：ナムコへの入社」2018年2月
- WP#18-12 生稲史彦・嶋原盛之・山口翔太郎「岩谷徹第5回インタビュー前半：エンターテインメント企業としてのナムコ」2018年2月

- WP#18-13 生稲史彦・鳴原盛之・山口翔太郎「岩谷徹第5回インタビュー後半：ゲーム開発から大学教育へ」2018年2月
- WP#18-14 生稲史彦・鳴原盛之・山口翔太郎「石井ぜんじ第1回インタビュー前半：ゲームの魅力を発信する仕事」2018年2月
- WP#18-15 生稲史彦・鳴原盛之・山口翔太郎「石井ぜんじ第1回インタビュー後半：ゲーム産業におけるゲーム雑誌の役割」2018年2月
- WP#18-16 清水洋・金東勲・鳴原盛之・山口翔太郎「佐藤秀樹第1回インタビュー前半：幼少期の暮らし」2018年2月
- WP#18-17 清水洋・金東勲・鳴原盛之・山口翔太郎「佐藤秀樹第1回インタビュー後半：中学時代からセガ入社まで」2018年2月
- WP#18-18 清水洋・鳴原盛之・山口翔太郎「佐藤秀樹第2回インタビュー前半：テレビゲームの開発に着手」2018年2月
- WP#18-19 清水洋・鳴原盛之・山口翔太郎「佐藤秀樹第2回インタビュー後半：家庭用ゲーム機における任天堂との競争」2018年2月
- WP#18-20 清水洋・鳴原盛之・山口翔太郎「佐藤秀樹第3回インタビュー前半：ゲームにおけるハードとソフト」2018年2月
- WP#18-21 清水洋・鳴原盛之・山口翔太郎「佐藤秀樹第3回インタビュー後半：セガサターン、ドリームキャスト、ソフトウェアメーカーへの転身」2018年2月
- WP#18-22 江藤学・生稲史彦・金東勲・木村めぐみ・中村彰憲・鳴原盛之・清水洋・山口翔太郎「西角友宏第1回インタビュー前半：中学時代までの生い立ち」2018年2月
- WP#18-23 江藤学・生稲史彦・金東勲・木村めぐみ・中村彰憲・鳴原盛之・清水洋・山口翔太郎「西角友宏第1回インタビュー後半：高校時代からパシフィック工業への入社まで」2018年2月

- WP#18-24 江藤学・生稲史彦・金東勲・木村めぐみ・嶋原盛之・清水洋・山口翔太郎「西角友宏第2回インタビュー前半：「スカイファイター」の開発」2018年2月
- WP#18-25 江藤学・生稲史彦・金東勲・木村めぐみ・嶋原盛之・清水洋・山口翔太郎「西角友宏第2回インタビュー後半：メカゲームからビデオゲームへ」2018年2月
- WP#18-26 福田一史・生稲史彦・井上明人・金東勲・木村めぐみ・中村彰憲・嶋原盛之・清水洋・山口翔太郎「西角友宏第3回インタビュー前半：「スペースインベーダー」開発の経緯」2018年2月
- WP#18-27 福田一史・生稲史彦・井上明人・金東勲・木村めぐみ・中村彰憲・嶋原盛之・清水洋・山口翔太郎「西角友宏第3回インタビュー後半：「スペースインベーダー」のゲームデザインとマーケティング」2018年2月
- WP#18-28 福田一史・井上明人・金東勲・木村めぐみ・嶋原盛之・山口翔太郎「西角友宏第4回インタビュー前半：その後のゲーム開発」2018年2月
- WP#18-29 福田一史・井上明人・金東勲・木村めぐみ・嶋原盛之・山口翔太郎「西角友宏第4回インタビュー後半：コンシューマーゲームの開発と未来のゲームへの展望」2018年2月
- WP#18-30 Nishiguchi, Toshihiro, “Crisis Management in Fukushima: How Commensurate Trust Emerged through Collaboration between Toyota, Nissan, Denso and Others,” March 2018
- WP#18-31 Nishiguchi, Toshihiro, “Crisis Management Under Stress: How Japanese Automakers Helped a Key Electronics Supplier After the Fukushima Disaster,” March 2018
- WP#18-32 西口敏宏「現代のオーラルヒストリー：福島におけるクライシス・マネジメント（トヨタ I）」2018年3月
- WP#18-33 西口敏宏「現代のオーラルヒストリー：福島におけるクライシス・マネジメント（トヨタ II）」2018年3月

- WP#18-34 西口敏宏「現代のオーラルヒストリー：福島におけるクライシス・マネジメント（経済産業省）」2018年3月
- WP#18-35 西口敏宏「現代のオーラルヒストリー：福島におけるクライシス・マネジメント（ルネサス）」2018年3月
- WP#18-36 西口敏宏「現代のオーラルヒストリー：福島におけるクライシス・マネジメント（日産）」2018年3月
- WP#18-37 西口敏宏「現代のオーラルヒストリー：福島におけるクライシス・マネジメント（日野自動車）」2018年3月
- WP#18-38 西口敏宏「現代のオーラルヒストリー：福島におけるクライシス・マネジメント（デンソー）」2018年3月
- WP#18-39 西口敏宏「現代のオーラルヒストリー：福島におけるクライシス・マネジメント（東京エレクトロン）」2018年3月
- WP#18-40 西口敏宏「現代のオーラルヒストリー：福島におけるクライシス・マネジメント（アプライド マテリアルズ ジャパン）」2018年3月

3. ケーススタディー——2017年度

諸企業に関する最新の調査成果の外部報告を、ケーススタディとして適宜発行している ([http://pubs.iir.hit-u.ac.jp/ja/pdfs/index?did\[\]=2&cid\[\]=6&cid\[\]=7&s=dd&ppc=20](http://pubs.iir.hit-u.ac.jp/ja/pdfs/index?did[]=2&cid[]=6&cid[]=7&s=dd&ppc=20))。

CASE#17-03 吉岡（小林）徹・木村めぐみ・江藤学「地域イノベーションの事例研究：高知におけるファインバブルの農業・水産業への応用」2017年5月

The new combinations appear discontinuously, then
the phenomenon characterising development emerges.

Joseph A. Schumpeter
The Theory of Economic Development

編集・発行 一橋大学イノベーション研究センター
〒 186-8603
東京都国立市中 2-1
TEL 042-580-8411 (代表)
FAX 042-580-8410
<http://www.iir.hit-u.ac.jp>



一橋大学
イノベーション研究センター

Hitotsubashi University
Institute of Innovation Research